障害者のきょうだいの情緒的特徴に関する研究
——きょうだいの意識と欲求不満の視点から——

髙野恵代*・岡本祐子*

Study of the emotional characteristics of siblings of the handicapped ; from the perspectives of attitudes and frustrations of the siblings

Yasuyo Takano* and Yuko Okamoto*

The purpose of the present study was to determine the effects that the handicapped have on their siblings from two perspectives. Study 1 was conducted on a group of subjects who had handicapped siblings (the "handicapped siblings" group, hereafter called the HS group) and a group of subjects who did not have handicapped siblings (the "non handicapped siblings" group, hereafter called the NHS group). We used a questionnaire to compare the attitudes of these subjects toward their siblings. The results showed that the two groups had different attitudes toward their siblings. In particular, the fact that the subjects of the HS group had marriage problems and apprehensions about the future showed that they had a lot of conflict and stress when they reached a crossroad in their life. In study 2, we investigated the emotional characteristics of the HS group using the P-F Study (Picture-Frustration Study), which focused on feelings of frustration. The results showed that males in the HS group showed a tendency toward Extraggression (E-A) and females in the HS group showed a tendency toward Intraggression (I-A) and Imaggression (M-A).

Key Words : Handicapped Siblings, attitudes, Frustration, P-F study

問題と目的

障害者をめぐる家族の問題

1981年の国際障害者年制定以降，障害者が地域社会の中で健常者と共に普通の生活を送るノーマライゼーションが障害者福祉の理念として広く知られるようになり，社会全体に障害者福祉に対する関心が高まってきた。しかし，障害者を抱える家族は，家庭内で発生する諸問題だけでなく地域社会との関わりの中でも様々な問題に直面し，心理的・社会的ストレスを負わせられている(伊藤，1986)。これまで，障害者の家族に対する福祉の直接的援助や実態調査は，両親や母親を中心に行われてきた。なぜなら障害者の養育の中心となるのが両親や母親であるため，彼らを援助することで障害者の問題も解決すると考えられたためである(三原・松本・豊山，2005)。しかし，これらは両

*広島大学大学院教育学研究科(Graduate School of Education, Hiroshima University)

親だけでなくきょうだいにも影響を与えているにも関わらず，きょうだいに関する体系的な研究は少ないばかりでなく，研究された論文自体，経験主義的傾向が強く客観的なデータに基づいた実証的な研究がほとんどなされていない(橘・島田，1998)。三原(1998)は，高齢化社会を迎えた今，障害者の家族は障害者の高齢化と同時に両親の高齢化の問題を抱えた二重の介護問題に直面しており，きょうだいの援助的役割が大きくなるという。障害者の家族支援のためにも，母親だけでなくきょうだいに対する理解も深める必要がある。なお，本研究では，障害者を「同胞」，その兄弟姉妹を「きょうだい」と区別して表記することにする。

きょうだいの特徴

きょうだいの心理的・行動的特徴と，性別や出生順序，同胞の障害の程度によって生じる違いなど，きょうだいの問題や家族関係に影響を及ぼしているさまざまな要因が先行研究で明らかにされている(平川，1986；Lobat，1983；三原，2000・2003；三原・松本・豊山，2005；西村・原，1996)。

たとえば，出生順位は，きょうだいの人格に影響を与えることが示唆されている(三原，1993)。同胞ときょうだいの年齢が近いことがきょうだいのストレスを増大させ，年上きょうだいは早熟化する傾向があり，年下の場合は主観的同胞順位の逆転が生じる(西村・原，1996a)。また，女性のきょうだいは男性のきょうだいよりも，同胞の世話をよく行い，大人になってからも世話をし続ける傾向があるが，親の対応が厳しいこと，自身のことが優先されない待遇への不満が高く，親に対する不満も高いことが明らかにされている(吉川，1993)。障害の程度については，重度障害よりも軽度障害の同胞の方がきょうだいはその影響を受けやすいとされ，障害の種類については，それがきょうだいの心理的適応にそれほど影響を及ぼさないという(三原，2000)。しかし，障害や疾患の選定基準が曖昧で，対象者数の確保からあえて複数の種類を混在させており，対象の厳密さに欠ける研究が多い。障害の種類によるきょうだいへの心理的影響については，今後の課題とされている。

以上，きょうだいの特徴については，もちろん個人差はあるが，障害者問題は社会的環境に影響されており(橘・島田，1999)，その他の要因による影響も考慮する必要がある。

きょうだいが抱える問題

健常な兄弟姉妹関係では，互いに対等な役割関係をもつ(中西，1993)が，障害者のきょうだいの場合は出生順序に関係なく，幼少期より同胞の援助者としての役割を担うことが多い。これによって生じる不満やストレスが，きょうだいの情緒的問題や家族関係の問題を引き起こすと考えられる。

益満・江頭(2002)は，きょうだいのストレスとして，親の関心が同胞ばかりに向いていること，年齢不相応な過重負担を負わされること，同胞に対する周囲の中傷，将来的に同胞の世話をする負担をあげている。そして，きょうだいは家庭状況および同胞に対する不満や怒りといった否定的感情を表出することが困難で，強いストレスを感じながらも責任感に基づいた献身的な態度を示すと指摘する。また，きょうだいの中には，幼い頃から障害者と両親に対する葛藤が解決されないまま大人になった者も存在し，そのようなきょうだいは，人生や結婚に対して否定的に考える傾向が見られるという。そうしたきょうだいに対する意識調査を行うため，橘・島田(1998)は，きょうだいに対する今後の精神保健的ケアの参考にすることを目的に，きょうだい関係に対する意識を中心に，障害者をきょうだいにもつ者(Handicapped Siblings :HS 群)ともたない者(Non Handicapped Siblings :

NHS 群)で比較した。その結果，HS 群は障害者から直接の影響を受け，ストレスフルな状況におかれていることが推察される一方で，きょうだい自身の生き方に NHS 群にはみられない幅の広い人間性が培われている様子も伺われた。この結果から，きょうだいは多くの場面，特に人生の岐路において，自分と同胞との間で葛藤状態にあるといえる。それゆえ，橘らは，きょうだいに対する精神保健的ケアが必要であり，特に，少子高齢化が進む今後の大きな課題と位置づけている。

このように，きょうだいは同胞の存在によって，ストレスや欲求不満，葛藤といったマイナスの影響を受け，健常きょうだいよりもストレスや不満を感じているといえる。しかしその一方，きょうだいは同胞とともに成長する中で，家族の中で重要な役割を担うことで，能力や自尊心を拡大するとともに，人格の成熟を早め，責任感を育んでいることが示唆されてきた(西村，2004)。

以上より，本研究では，きょうだいは，同胞の存在によってどのような影響を受けているのかを検討するために，きょうだいに対する意識に関する質問紙によって，同胞をきょうだいに持つ群(Handicapped Siblings:以下，HS 群)と持たない群(Non Handicapped Siblings:以下，NHS 群)のきょうだいに対する意識を比較することにより，HS 群が抱える問題と，両群間の意識の違いを明らかにすることを目的とする(研究 1)。そして，家族に同胞を抱えた特殊な環境の中で成長してきたとされる HS 群は，ストレスや欲求不満，葛藤場面において，NHS 群とは異なる特徴を示す可能性が高い。そこで欲求不満感情に焦点を当てた投映法検査の P-F スタディ(絵画欲求不満テスト：Picture-Frustration Study)を用いて両群を比較することによって，HS 群の情緒的特徴や性質の違いを明らかにすることを目的とする(研究 2)。

研究 1

目的

橘・島田(1998)が作成したきょうだいに対する意識に関する質問紙によって，HS 群と NHS 群のきょうだいに対する意識を比較することにより，HS 群が抱える問題と，両群間の意識の違いを検討する。先行研究では，NHS 群においてはごく一般的な意識であるが，HS 群においては，きょうだい属性(高校生・大学生・社会人など)別に，家族・きょうだい関係についてはアンビバレントな意識，社会との関係での意識がうかがえたことから，きょうだいは同胞による影響を受け，ストレスを内包した意識が示された。本研究では，それらの意識の再検討に加え，人生の岐路の 1 つである「結婚」に関する意識について詳細に検討することを目的とする。

方法

1) **調査対象者**　15 歳以上の NHS 群 78 名(平均年齢 20.96 歳, *SD*=4.10)と, 15 歳以上の HS 群 33 名(平均年齢 26.32 歳，*SD*=7.95)。HS 群は，A 県の肢体不自由児父母の会会員，授産施設に通所している方，特別支援学校に在籍している児童・生徒のきょうだいを対象とした。HS 群における回収率は 33%であった。

2) **調査時期**　2007 年 11 月－12 月。

3) **手続き**　NHS 群は集団実施，HS 群は郵送または直接依頼で行った。

4) **質問紙構成**　①橘・島田(1998)が使用したきょうだいの影響に関する質問紙。35 項目 4 件法。質

問項目は両群とも同一である。②P-F スタディ成人用。③フェイス項目(性別，年齢，職業，きょうだい数，出生順位，父母の年齢，現在の生活形態)。HS 群では，同胞の性別，年齢，出生順位，障害名と障害階級(身体障害者手帳，療育手帳)，職業，現在の生活形態を記入してもらった。

5) 分析　各項目の回答をそれぞれ，「非常によくあてはまる」を 1 点から「まったくあてはまらない」を 4 点として得点化し，項目ごとに t 検定を行った。そして，有意差が出た項目のうち，5 項目について，きょうだいの属性別に t 検定を行った。

結果

1. きょうだいの属性

以下に，両群のきょうだいの属性(Table 1-1)と HS 群の同胞の属性(Table 1-2)を示す。なお，障害者手帳と療育手帳の階級については未記入のものが多く，障害の程度については検討しない。

Table 1-1
きょうだいの属性

	HS群(N=33)			NHS群(N=78)		
平均年齢	26.32	(Min=15,Max=45)		20.96	(Min=18,Max=50)	
SD	7.95			4.10		
性別	男性	15	45%		29	37%
	女性	16	49%		49	63%
	未記入	2	6%			
きょうだい数	2人きょうだい	14	43%	2人きょうだい	46	59%
	3人きょうだい	14	42%	3人きょうだい	28	36%
	4人以上	3	9%	4人以上	4	5%
	未記入	2	6%			
出生順位	第一子	11	34%	第一子	38	49%
	第二子	9	27%	第二子	29	37%
	第三子以降	11	33%	第三子以降	11	14%
	未記入	2	6%			
職業	高校生	2	6%	大学生	74	95%
	大学生	8	24%	大学院生	3	4%
	会社員	14	43%	主婦	1	1%
	主婦	4	12%			
	その他	2	6%			
	未記入	3	9%			
父の年齢	59.41	(Min=49,Max=77)		52.21	(Min=44,Max=68)	
SD	6.66			4.76		
母の年齢	55.52	(Min=45,Max=74)		49.38	(Min=39,Max=62)	
SD	7.85			4.32		

HS群:Handicapped Siblings
NHS群:Non Handicapped Siblings

Table 1-2
HS群における同胞の属性

平均年齢	27.43	(Min=13,Max=46)	
SD	9.00		
未記入	2		
性別	男性	19	59%
	女性	13	41%
出生順位	第一子	12	38%
	第二子	14	43%
	第三子以降	5	16%
	未記入	1	3%
職業	中学生	1	3%
	高校生	2	6%
	作業所・通所施設	15	47%
	社会人	1	3%
	その他	6	19%
	未記入	7	22%
障害名	知的障害	6	19%
	自閉症	5	16%
	脳性(小児)麻痺	8	25%
	二分脊椎	2	6%
	体幹機能障害	3	9%
	その他	2	6%
	未記入	6	19%

HS群:Handicapped Siblings

2. 項目の分析

(1)両群の平均および統計的検定

両群の意識の違いを検討するため，項目ごとに t 検定を行った(Table 2)。結果，HS 群が NHS 群よりも有意に低かった項目は，項目 1「きょうだいを念頭においた人生設計」($t(54)=2.488, p<.05$)，項目 10「近くに住む」($t(53)=2.126, p<.05$)，項目 12「きょうだいについて相談できる友達」($t(105)=2.401, p<.05$)，項目 21「きょうだいの存在による結婚への不利な影響」($t(105)=2.786, p<.01$)，項目 24「きょうだいを念頭においた結婚」($t(105)=2.919, p<.01$)，項目 35「結婚観」($t(52)=2.076, p<.05$)であった。HS 群が NHS 群よりも有意に高かった項目は，項目 9「年上のきょうだいよりも早い結婚」($t(105)=2.465, p<.05$)，項目 14「きょうだいとの親密さ」($t(58)=2.480, p<.05$)，項目 31「成績の差によるきょうだい関係への影響」($t(51)=2.366, p<.05$)であった。

Table 2
両群の各項目の平均と標準偏差

項目	全体(N=107)		HS(N=31)		NHS(N=76)		
	M	SD	M	SD	M	SD	t
1 きょうだいを念頭においた人生設計	2.85	0.81	2.55	0.81	2.97	0.78	*
2 きょうだいに対する地域の人の目	2.85	0.83	2.94	0.85	2.82	0.83	
3 結婚の同意	3.15	0.84	3.26	0.73	3.11	0.89	
4 家族の絆	2.00	0.77	2.00	0.77	2.00	0.77	
5 家業を継ぐ	3.08	0.91	3.26	1.00	3.01	0.87	
6 きょうだいの出世ときょうだい関係	3.53	0.65	3.65	0.66	3.49	0.64	
7 地元で就職	2.59	1.04	2.39	1.05	2.67	1.02	
8 きょうだいを念頭においた職業選択	3.08	0.87	2.94	0.89	3.14	0.86	
9 年上のきょうだいよりも早い結婚	3.56	0.59	3.77	0.43	3.47	0.62	*
10 近くに住む	2.77	0.88	2.48	0.89	2.88	0.85	*
11 きょうだい関係の家族に対する影響	2.50	0.89	2.29	0.97	2.59	0.85	
12 きょうだいについて相談できる友達	3.09	0.81	2.81	0.98	3.21	0.70	*
13 きょうだいの職業の影響	3.44	0.70	3.55	0.68	3.39	0.71	
14 きょうだいとの親密さ	2.24	0.94	2.58	0.89	2.11	0.93	*
15 親戚づきあい	2.57	0.81	2.71	0.86	2.51	0.79	
16 きょうだいの進学・就職の影響	2.74	0.93	3.03	1.02	2.62	0.86	†
17 老後における相互の援助	2.38	0.85	2.29	0.69	2.42	0.91	
18 ボランティア活動	2.47	0.94	2.29	0.86	2.54	0.96	
19 親の希望を加味した就職	2.82	0.82	3.13	0.85	2.70	0.78	*
20 きょうだいとともに成長	2.39	0.86	2.45	0.85	2.37	0.86	
21 きょうだいの存在による結婚への不利な影響	3.56	0.66	3.29	0.86	3.67	0.53	**
22 きょうだいとの地域活動への参加	3.23	0.72	3.00	0.82	3.33	0.66	†
23 きょうだいによる人間的な成長	1.87	0.85	1.71	0.90	1.93	0.82	
24 きょうだいを念頭においた結婚	2.86	0.96	2.45	1.09	3.03	0.85	**
25 社会向上意識	2.09	0.72	2.13	0.76	2.08	0.71	
26 きょうだいは尊敬すべき大切な存在	2.26	0.89	2.35	0.88	2.22	0.90	
27 きょうだいの職業に対する抵抗	3.01	0.85	3.13	0.96	2.96	0.81	
28 家族と地域	2.11	0.69	2.23	0.67	2.07	0.70	
29 きょうだいが困った時の経済的援助	2.09	0.75	2.00	0.86	2.13	0.70	
30 将来のきょうだい関係	1.66	0.74	1.58	0.72	1.70	0.75	
31 成績の差によるきょうだい関係への影響	3.19	0.81	3.48	0.85	3.07	0.77	*
32 きょうだいに対する疎ましさ	2.85	0.86	2.87	0.88	2.84	0.85	
33 希望職種	2.90	0.91	2.77	1.06	2.95	0.85	
34 きょうだいについて話す	2.07	0.97	2.29	1.10	1.99	0.90	
35 結婚観	1.84	0.81	1.58	0.85	1.95	0.78	**

†$p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$

(2)きょうだいの属性による差の検討

項目ごとに t 検定を行った結果，有意差がみられた 10 項目のうち，項目 1，12，21，24，35 について，HS 群と NHS 群できょうだいの属性によって違いがあるのか検討した。なお，学生は高校生，

Table 3
項目1「きょうだいを念頭においた人生設計」

		HS群		NHS群		
		M	*SD*	*M*	*SD*	*t*
性別	男性	2.60	0.83	2.82	0.91	
	女性	2.57	0.76	3.06	0.70	*
きょうだい数	二人	2.42	0.90	3.04	0.68	**
	三人以上	2.71	0.69	2.87	0.92	
出生順位	長子	2.56	0.88	3.00	0.81	
	第二子以降	2.60	0.75	2.95	0.77	
職業	学生	2.78	0.67	2.99	0.78	
父年齢	54歳以下	2.57	0.54	3.09	0.78	†
	55歳以上	2.55	0.89	2.57	0.94	
母年齢	51歳以下	2.89	0.78	2.98	0.75	
	52歳以上	2.39	0.78	2.88	1.05	

†$p<.10$ *$p<.05$ **$p<.01$

大学生，大学院生を含んでいる。父母の年齢は，両群を合わせた平均(父 54.48 歳，母 51.28 歳)を基準に，父年齢を 54 歳以下と 55 歳以上，母年齢を 51 歳以下と 52 歳以上に分類して分析にかけた。

まず，項目 1「きょうだいを念頭においた人生設計」のきょうだいの属性ごとに *t* 検定を行った(Table 3)。結果，性別において，HS 群の女性は，NHS 群の女性より有意に低かった($t(19)=2.176, p<.05$)。また，きょうだい数においては，HS 群の二人きょうだいは，NHS 群の二人きょうだいより有意に低かった($t(55)=2.669, p<.01$)。

次に，項目 12「きょうだいについて相談できる友達」のきょうだいの属性ごとに *t* 検定を行った(Table 4)。結果，性別において，HS 群の男性は，NHS 群の男性より有意に低く($t(23)=2.317, p<.05$)，また，出生順位において，HS 群の長子は NHS 群の長子より有意に低かった($t(9)=2.668, p<.05$)。職業において，HS 群の学生は NHS 群の学生より有意に低かった($t(82)=2.056, p<.05$)。

そして，「結婚」に関する項目 21，24，35 について，きょうだいの属性別に *t* 検定を行った(Table 5)。結果，項目 21 では，性別において，HS 群の男性は，NHS 群の男性よりも有意に低かった($t(41)=2.393, p<.05$)。項目 24 では，性別において，HS 群の男性は，NHS 群の男性よりも有意に低く($t(41)=2.816, p<.01$)，また，出生順位において，HS 群の長子は，NHS 群の長子より有意に低かった($t(45)=3.520, p<.01$)。項目 35 では，職業において，HS 群の学生は，NHS 群の学生より有意に低かった($t(14)=4.282, p<.01$)。また，HS 群内において学生と社会人($M=2.00$，$SD=1.08$)で *t* 検定を行ったところ，学生が社会人に比べて有意に低かった($t(22)=2.369, p<.05$)。

Table 4
項目12「きょうだいについて相談できる友達」

		HS群		NHS群		
		M	*SD*	*M*	*SD*	*t*
性別	男性	2.73	0.96	3.39	0.74	*
	女性	2.93	0.92	3.10	0.66	
きょうだい数	二人	3.00	1.04	3.31	0.67	
	三人以上	2.71	0.85	3.06	0.73	
出生順位	長子	2.67	0.87	3.47	0.56	*
	第二子以降	2.90	0.97	2.95	0.73	
職業	学生	2.67	1.12	3.21	0.70	*
父年齢	54歳以下	3.14	0.69	3.23	0.67	
	55歳以上	2.75	0.91	2.79	0.80	
母年齢	51歳以下	3.33	0.71	3.17	0.71	
	52歳以上	2.61	0.85	3.06	0.75	

*$p<.05$ **$p<.01$

Table 5
結婚に関する項目におけるきょうだい属性別による差の検討

		項目21「きょうだいの存在による結婚への不利な影響」					項目24「きょうだいを念頭においた結婚」					項目35「結婚観」				
		HS群		NHS群			HS群		NHS群			HS群		NHS群		
		M	*SD*	*M*	*SD*	*t*	*M*	*SD*	平均	*SD*	*t*	*M*	SD	*M*	SD	*t*
性別	男性	3.13	0.83	3.64	0.56	*	2.47	1.06	3.25	0.75	**	2.00	1.00	2.21	0.96	
	女性	3.57	0.85	3.69	0.51		2.57	1.16	2.90	0.88		1.14	0.36	1.79	0.62	
きょうだい数	二人	3.25	0.97	3.64	0.53	†	2.17	1.12	3.04	0.85		1.58	1.00	1.96	0.77	
	三人以上	3.41	0.80	3.71	0.53		2.76	1.03	3.00	0.86		1.59	0.80	1.94	0.81	
出生順位	長子	3.33	0.50	3.71	0.57	†	2.11	1.27	3.29	0.80	**	1.67	0.87	2.13	0.84	
	第二子以降	3.35	0.99	3.63	0.49		2.70	0.98	2.76	0.82		1.55	0.89	1.76	0.68	
職業	学生	3.44	0.88	3.67	0.53		2.89	0.93	3.03	0.85		1.22	0.44	1.96	0.78	**
父年齢	54歳以下	3.86	0.38	3.66	0.56		2.43	0.98	2.89	0.89		1.57	1.13	1.79	0.66	
	55歳以上	3.30	0.87	3.71	0.47		2.65	1.14	3.00	0.78		1.65	0.81	1.93	0.73	
母年齢	51歳以下	3.89	0.33	3.72	0.50		3.00	1.12	2.83	0.85		1.67	1.12	1.80	0.69	
	52歳以上	3.22	0.88	3.59	0.62		2.39	1.04	3.12	0.86	*	1.61	0.78	1.88	0.70	

†$p<.10$ *$p<.05$ **$p<.01$

考察

項目ごとに *t* 検定を行った結果，10 項目において，両群における意識の違いが明らかになった。

項目 1「きょうだいを念頭においた人生設計」では，HS 群にとって人生設計は自分だけのものではなく，同胞とともにある，または同胞の存在を考慮したうえで考えていく意識が強いと考えられる。しかし，その意識が肯定的なのものであるのか否定的なのものであるかは，本研究では明らかにできなかった。また，HS 群の男女間では有意差が見られなかったが，女性の方が男性よりもやや平均が高かったことから(Table 3)，女性のきょうだいは男性のきょうだいに比べて同胞の世話をよく行い，大人になってからも世話をし続ける傾向があるとする先行研究(吉川，1993)を支持する結果だと考えられる。

項目 12「きょうだいについて相談できる友達」では，HS 群は NHS 群よりも，きょうだい関係について悩みを話せる友達が欲しいと考えていることが示唆された(Table 3)。とくに，HS 群の長子の場合，その思いが強いといえる(Table 4)。同胞に関する悩みを抱えながらも，友達に相談することがはばかられ，ストレスが生じていると推察され，その背景としては，社会における障害者の理解が低いことが考えられる。先行研究(橘・島田，1998)でも，きょうだいは障害者や家族に関する悩みを相談できる友達を求めながらも「話したところで何も分かってくれない」，「同じ境遇の者にしか分からない」という排他的な意識が高く，さらに，悩みを相談できる友達を求めているが相談できる相手が現実にはいないということが問題であると指摘しており，その内容を検討する必要がある。

項目 21「きょうだいの存在による結婚への不利な影響」，項目 24「きょうだいを念頭においた結婚」からは，HS 群は NHS 群よりも，結婚を考える際にはきょうだいのことも意識し，加えて，きょうだいがいることが結婚に不利になると思う傾向があることが示唆された。これは，障害者のきょうだいの結婚問題の深刻さを指摘する先行研究(吉川，1993)を支持する結果といえる。とくに，男性ときょうだい数が 2 人の場合意識が高く(Table 5)，同胞の与える影響は大きいと言える。それは，橘・島田(1998)が指摘するように，日本の社会文化における男性と長子の役割期待から生ずる負担が，意識の高さに反映されているのではないかと考えられる。また，項目 35「結婚観」では，

HS 群は NHS 群よりも，障害者に優しい人と結婚したいと思う意識が強いことが示唆された。これは HS 群に特徴的な意識であるといえる。障害者に対する理解が必要であるばかりでなく，将来的に同胞のケアをしていくためには，配偶者の協力も必要となる場合があると考えられる。とくに，大学生を比較すると(Table 5)，この意識が高く，現実味を帯びた問題だとも推察される。きょうだいの抱える悩みを質的に検討するだけでなく，援助の視点も必要である。

以上より，HS 群のきょうだいに対する意識と NHS 群のきょうだいに対する意識は異なっていることが示された。これは HS 群が同胞の影響を受けているためだといえる。特に，結婚問題や将来に対する不安がみられたことは，きょうだいは人生の岐路において，多くの葛藤やストレスを抱いているとする橘・島田(1998)の先行研究を支持する結果といえる。少子高齢化が進む中で，きょうだいの負担はますます大きくなる可能性がある。HS 群は同胞の存在による影響を受けていることが明らかになったが，その影響を具体化するために，質的に検討する必要がある。

研究 2

目的

家族に同胞を抱えた特殊な環境の中で成長してきたとされる HS 群は，ストレスや欲求不満，葛藤場面において，NHS 群とは異なる特徴を示す可能性が高い。そこで欲求不満感情に焦点を当てた投映法検査の P-F スタディ(絵画欲求不満テスト：Picture-Frustration Study)によって，P-F スタディの結果を両群で比較することにより，HS 群の情緒的特徴や性質の違いについて明らかにする。

方法

1) **調査対象者**　NHS 群 74 名(平均年齢 21.03 歳, *SD*=4.20)と，HS 群 30 名(平均年齢 26.71 歳, *SD*=8.18)。HS 群の対象者は研究 1 と同様である。HS 群における回収率は 30%であった。

2) **調査時期**　2007 年 11 月－12 月。

3) **手続き**　標準化されている P-F スタディ(成人用)を使用した。NHS 群は集団実施，HS 群は郵送または直接依頼で行った。

4) **分析**　林(1978)の評点表および成人用各場面評点上の注意事項に留意して各反応語を評点し，反応評点因子別，反応評点カテゴリー別，超自我因子別および GCR の集計を行い，得点化して性別に *t* 検定を行った。また，各反応において，きょうだいの属性別について分散分析を行った。評定の信頼性を検討するため，筆者と臨床心理学を専攻する大学院生 2 名によって評定を行った。結果，評定者一致率は 78.49%であり，一致しない項目は評定者間で協議のうえ決定した。

結果

1. 反応評点による分析

両群の男女別反応評点因子の平均と標準偏差を，Table 6 に示した。反応評点因子別に *t* 検定を行った結果，男性では，他責逡巡反応(E')において有意な差($t(33)=2.154, p<.05$)が，自責逡巡反応(I')において有意傾向($t(25)=1.736, p<.1$)がみられた。女性では，他責逡巡反応(E'；$t(57)= 2.385, p<.05$)，他罰反応(E/E；$t(18)=2.664, p<.05$)と有意な差がみられ，自罰反応(I/I；$t(24)=1.856, p<.1$)，自責固執(i；$t(54)=1.856, p<.1$)と有意傾向がみられた。なお，職業別では男女ともに差はみられなかった。

Table 6
男女別反応評点因子の平均と標準偏差

			男性					女性				
			HS群(n=14)		NHS群(n=28)			HS群(n=16)		NHS群(n=46)		
			M	SD	M	SD	t	M	SD	M	SD	t
他責	他責逡巡	E'	4.11	1.40	3.00	1.86		2.50	1.14	3.70	1.70	*
	他　罰	E/E	4.58	2.86	3.96	2.20		3.96	1.68	2.58	1.55	*
	他責固執	e	1.50	0.75	1.39	0.60		1.78	0.62	1.49	0.84	
自責	自責逡巡	I'	2.00	0.89	2.54	0.98	†	2.77	1.11	2.34	1.04	
	自　罰	I/I	4.04	1.46	3.30	1.53		3.21	1.17	3.90	1.37	†
	自責固執	i	2.04	1.20	2.02	1.24		2.50	1.37	1.87	1.00	†
無責	無責逡巡	M'	1.63	0.25	1.48	0.67		1.79	0.81	1.57	0.85	
	無　罰	M	4.18	2.37	4.84	1.64		4.68	1.71	4.69	1.42	
	無責固執	m	1.46	0.82	1.63	1.08		1.92	1.04	2.04	1.15	

†p<.10 *p<.05

男性では，他責反応の下位カテゴリー(E'，E，e)において，HS 群は NHS 群より平均値が高く，他責傾向がみられた。自責反応の下位カテゴリー(I'，I，i)では，自罰反応(I)のみ HS 群の平均値が高かった。また，自責逡巡反応(I')において，2 要因の分散分析を行った(Table 7-1,7-2)。結果，HS 群のきょうだい数と出生順位の交互作用が有意であったので(F(1,9)=4.401,p<.01)，単純主効果の検定を行ったところ，第二子以降におけるきょうだい数の単純主効果が有意であり(F(1,9)=11.56,p<.01)，2 人きょうだいにおける出生順位の単純主効果が有意であった(F(1,9)=6.73,p<.05)。これより，2 人きょうだいの場合は第二子以降の方が長子より自責逡巡反応(I')が高く，3 人きょうだい以上の場合は長子の方が第二子以降よりも自責逡巡反応(I')が高いといえる。つまり，HS 群の長子ほど不満を表明しない傾向がみられた。無責反応の下位カテゴリー(M'，M，m)では，無責逡巡反応(M')のみ HS 群の平均が高かった。

女性では，他責反応の下位カテゴリー(E'，E，e)において，HS 群の他責逡巡反応(E')は NHS 群より有意に低く，他罰反応(E)は有意に高かった。自責反応の下位カテゴリー(I'，I，i)では，HS 群の自罰反応(I)は NHS 群より有意に低く，自責固執反応(i)では有意に高かった。HS 群の自責固執反応(i)において，きょうだい数と出生順位による 2 要因の分散分析を行った結果(Table 8-1,8-2)，出生順位の主効果が有意であり(F(1,10)=7.59,p<.05)，長子の方が第二子以降よりも自責固執反応(i)が高かった。

両群の男女別のアグレッションの方向と型による評点カテゴリーの平均と標準偏差を，Table 9 に示した。カテゴリー別，職業別では男女ともに差はみられなかった。男性は，アグレッションの方

Table 7-1
HS群男性の自責逡巡反応(I')における2要因分散分析表

	SS	df	MS	F	p
きょうだい数	1.15	1	1.15	2.25	
出生順位	0.97	1	0.97	2.14	
きょうだい数×出生順位	2.00	1	2.00	4.40	**
残差	4.09	9	0.46		
全体	61.50	13			

*p<.05 **p<.01

Table 7-2
HS群男性の自責逡巡反応(I')における分散分析表

		2人きょうだい(n=4)		3人きょうだい以上(n=9)			
		M	SD	M	SD	F(1,9)	多重比較
出生順位	長子	1.75	.35	2.00	.02	0.92	
	第二子以降	3.50	.71	1.69	.70	1.81**	3<2*

*p<.05 **p<.01

Table 8-1
HS群女性の自責固執反応(i)における2要因分散分析表

	SS	*df*	*MS*	*F*	*p*
きょうだい数	1.32	1	1.32	1.39	
出生順位	7.21	1	7.21	7.59	*
きょうだい数×出生順位	1.32	1	1.32	1.39	
残差	9.50	10	.95		
全体	112.00	14			

$^{*}p<.05$ $^{**}p<.01$

Table 8-2
HS群女性の自責固執反応(i)における分散分析表

		2人きょうだい(n=9)		3人きょうだい以上(n=5)			
		M	*SD*	*M*	*SD*	*F*(1,10)	多重比較
出生順位	長子	3.50	1.41	3.50	0.00	3.50	
	第二子以降	2.50	0.71	1.75	0.93	7.59*	

$^{*}p<.05$ $^{**}p<.01$

向では，HS 群は NHS 群よりも他責的(E-A)であり，アグレッションの型では自我防衛(E-D)が高かった。女性は，アグレッションの方向では，HS 群は NHS 群よりもやや自責的(I-A)，無責的(M-A)がみられ，アグレッションの型では，障害優位(O-D)が低く自我防衛(E-D)，欲求固執(N-P)がやや高かった。なお，男女ともに平均値は，標準平均，標準 *SD* 以内に収まっていた。

男女別超自我因子と GCR 得点の平均と標準偏差を，Table 10 に示した。それぞれ性別に *t* 検定を行ったところ，女性は，素朴な攻撃(E-E；$t(17)=2.064, p<.1$)，集団一致度(GCR；$t(22)=1.952, p<.1$)に有意傾向が，自己非難(I-I；$t(58)=2.948, p<.01$)に有意差がみられた。なお，職業別では男女ともに差はみられなかった。男性は，両群で大きな差はみられなかったが，HS 群男性では，自己非難(I-I)

Table 9
男女別評点カテゴリーの平均と標準偏差

		男性					女性				
		HS群(n=14)		NHS群(n=28)			HS群(n=16)		NHS群(n=46)		
		M	*SD*	*M*	*SD*	*t*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*t*
アグレッションの方向											
他責的	E-A	39.86	16.75	32.96	13.42		30.50	9.70	30.76	11.30	
自責的	I-A	33.43	8.58	34.00	7.15		35.36	6.38	33.37	8.34	
無責的	M-A	26.86	11.84	33.04	8.86		34.13	7.90	32.44	9.65	
アグレッションの型											
障害優位	O-D	27.71	7.13	30.71	9.44		27.36	10.17	31.89	9.08	
自我防衛	E-D	53.57	10.68	50.93	7.11		49.43	10.80	48.28	7.78	
欲求固執	N-P	18.64	8.73	19.19	8.73		23.36	9.50	20.44	8.13	

$^{*}p<.05$ $^{**}p<.01$

Table 10
男女別超自我因子とGCR得点の平均と標準偏差

		男性					女性				
		HS群(n=14)		NHS群(n=28)			HS群(n=16)		NHS群(n=46)		
		M	*SD*	*M*	*SD*	*t*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*t*
攻撃的否認	E	4.22	1.09	4.81	1.33		6.25	2.19	5.50	2.65	
自己保身	I	6.30	3.09	6.27	3.31		6.73	3.61	5.44	2.36	
自己抑制	E+I	7.85	3.76	7.48	3.76		9.62	4.25	8.07	3.78	
素朴な攻撃	E-E	16.42	9.28	15.36	9.37		12.62	7.21	8.07	6.06	†
自己非難	I-I	**13.21**	6.76	11.14	7.28		8.29	3.52	13.39	6.16	**
自己弁護	(M-A)+I	31.43	8.73	36.43	10.38		39.43	8.33	37.67	8.92	
集団一致度	GCR	53.14	10.30	55.32	14.04		55.79	10.79	62.26	11.11	†

注）標準平均+標準*SD*より高い平均値を太字で示す。

$^{\dagger}p<.10$ $^{*}p<.05$ $^{**}p<.01$

の平均値が標準平均よりも高かった。女性では，素朴な攻撃行動を示す反応(E-E)で，HS 群が NHS 群よりも有意に高く，逆に自己非難を示す反応(I-I)が有意に低かった。

考察

反応評点因子の比較(Table 6)と反応評点カテゴリーの比較(Table 9)から，男性では，HS 群は NHS 群より他責傾向がみられた。他責的反応は，欲求不満の原因を他人や環境のせいにする反応であるが，これが高い人は心の深層ではむしろいつも他人から非難されたり，攻撃されたり，不利なことをされたりするのではないかと気にする人で，そのため投射機制という自我の防衛機制により，反対に相手を非難し敵意を示すとされる。HS 群の評点はほぼ標準的であるが，NHS 群と比較するとやや高いことから，自我の防衛機制を働かせていることが考えられる。原因として，HS 群は障害者を抱えた特殊な環境の中で成長し，他人の目を気にしなければならない場面が多かったり，からかわれたりして，自尊心を傷つけられた可能性が考えられる。しかし，フラストレーションの障害を指摘(E')し，敵意的攻撃を他者に向ける反応(E)が高くても，フラストレーションについての自己の責任を認める反応(I)がやや高く，また，自己非難(I-I)が標準平均より高いことからも，自分の努力によって問題を解決しようとする傾向がみられるので，社会適応していく上では問題はないであろう。HS 群の男性は，自己非難の気持ちや贖罪感を持ちながら，適度な自己主張性を備えていると解釈できる。また，自責逡巡反応(I')において，HS 群は NHS 群より平均が低かったが，分散分析の結果から，HS 群はきょうだい数と出生順位の違いによって不満や失望を抑える傾向が異なることが示された。2 人きょうだいの場合は弟が，3 人きょうだい以上の場合は長子が不満や失望を抑える傾向を示した。この結果は，同胞を長子にもつ 2 人きょうだいの弟は主観的同胞順位の逆転から，3 人きょうだい以上は長子が，幼少期より精神的負担を感じてきたことから生じたものではないかと考えられる。NHS 群ではこの違いがみられなかったことからも，HS 群の男性長子は幼い頃より我慢せざるをえなかった経験が多かった可能性が推察される。

女性では，反応評点因子の比較(Table 6)の下位カテゴリーごとにみると，HS 群は NHS 群より他責傾向と自責傾向が見られたが，カテゴリー評定(Table 9)では，HS 群は NHS 群より自責的，無責的傾向に集約された。自責的反応は，欲求不満の原因を自分の責任に帰す反応で，これが高い人は何かにつけて後悔と罪の意識を抱きやすいとされる。無責的反応は，欲求不満の原因は誰にあるものでもなく不可避なことだと考える反応で，自己欺瞞や抑制といった防衛機制で自分を守ろうとする。HS 群の女性は，下位カテゴリーの自責逡巡反応(I')の平均値が NHS 群より高く，なおかつ標準より高い。そして下位カテゴリーの無責逡巡反応(M')の平均値も NHS の平均値より高かった。自責逡巡反応は，失望と不満を抱きながらそれを内に向け外には出そうとしない反応であり，無責逡巡反応は，失望や不満は一応抱くが攻撃を外に向けるとか内に向けるといったことはせず，他人にも自分にもアグレッションの矛先を向けることを避け，失望や不満の表明を最小限にとどめてしまう反応である。このことから，HS 群の女性は欲求不満場面において，失望や不満は外には表さず，自分に帰するか，あるいは失望や不満の感情を抑えてしまう傾向があると考えられる。しかし，自責固執反応(i)において，HS 群は NHS 群よりも有意に高く，なおかつ標準よりも高かったことから，ただ単に欲求不満感情を抑えてしまうのではなく，欲求不満を解消するために自己反省から問題を解決しようとする反応を示すことが明らかになった。この反応に関して，分散分析の結果から，HS 群の女性は，3 人きょうだい以上の長子，つまり長女において自責固執反応(i)が高いことが示され

た。HS 群の女性は，自分の心中の不満や失望を他人に知られたくないという気持ちが働き，そのために心中の不満が気づかれないような態度や言い方をするのではないかと考えられる。それは，同胞や家族に対する不満や怒り否定的感情を表出することが困難であるとする先行研究(益満・江頭，2002)を支持すると考えられる。そして，3 人きょうだい以上の長女は，不満の原因を自分に求め，自分の努力によって問題を解決しようとする傾向がみられた。これは，子どもの数が多い家族ほど長女が精神的負担を抱えやすいとする先行研究(三原，2000)から，贖罪感の強い長女は援助者としての役割を強く意識しており，自分が行動しなければならないといった強迫感を抱いているのではないかと考えられる。なお，両群の男女ともに平均値はほぼ標準であるので，日常的な欲求不満場面でごく普通の常識的な対応ができていることが示された。

総合考察

研究 1 では，HS 群と NHS 群のきょうだいに対する意識の違いと，兄弟姉妹から受ける影響の違いが示された。これは，性別，きょうだい数，出生順位といったきょうだいの属性によって左右され，同胞と共に生きていく上で将来に対する不安が推察された。これは先行研究とほぼ同様の結果が得られたといえる。しかし，量的不足から HS 群の因子構造がとり出せず，両群の意識の構造については検討することができなかった。障害の種類，職業別でも分析ができなかったため，今後はデータ量を増やし，また，両群の意識がどのように異なるのかを質的に検討する必要がある。

研究 2 では，HS 群の男性は他責的，女性は自責，無責的傾向がみられた。また，個々の因子やカテゴリーで違いが認められたが，全体的に HS 群と NHS 群で明らかな違いが認められなかった。そして，HS 群の示した反応が，同胞の影響を受けたものであることを明確にできなかった。これには 2 つの理由が考えられる。1 つは，成人したきょうだいにとって欲求不満感情に影響を与えているものは，必ずしも同胞の影響だけではない可能性があることである。2 つ目は方法論の問題である。評点による比較分析を行ったが，それよりも細かく反応語を質的に分析し，なおかつ NHS 群と比較することが必要であった。例えば，場面 15 は，欲求阻止者が自分の過失の謝罪を申し出ている自我阻害場面である。一般的に無罰反応が出る場面であるとされ，HS 群は男女とも全員無罰反応を示したが，無罰反応の中でも，「仕方ないよ，気にするな」と反応している者もいれば，「大丈夫だよ，次頑張ろう」といった相手を気遣った反応をしている者もいる。相手が傷つかないように，相手の気持ちを先に汲み取った反応を示すのは，HS 群の人間関係のあり方に何らかの特徴があるのではないかと考えられる。このように，HS 群の他者との距離の取り方，他者との関係性のあり方の特徴を検討することが必要であるといえる。そのためには，無罰すぎる反応や他罰すぎる反応といった極端な反応や，HS 群にみられた偏った反応についての詳細な検討が必要である。同胞による影響を示すためには，場面設定を親子場面，きょうだい場面，友達場面，見知らぬ人との場面など，欲求阻止者を明確に設定した修正版 P-F スタディを用いた研究を行い，それに質疑法を取り入れる方法が考えられる。そして，半構造化面接によってきょうだいの意識や問題を質的に検討することも必要である。

引用文献

林　勝造　(1987).　P-F スタディ解説—1987 年版—　三京房

平川忠敏　(1986).　障害児の同胞　幼年教育研究年報，**11**，65-72.

伊藤きよ子　(1986).　障害者をもつ家族の意識と態度に関する心理学的研究　東海学園大学紀要，**21**，13-31.

Lobato, D.　(1983). Siblings of handicapped children : A review. *Journal of Autism and Developmental Disorders*，**13**，347-364.

益満成美・江頭幸晴　(2002).　障害児のきょうだいにおける否定的感情表出の困難さについて　鹿児島大学胞文学部人文科学論集，**55**，1-13.

三原博光　(1998).　知的障害者の兄弟姉妹の生活体験について—幼少期の体験や両親とのかかわりなどを中心に—　発達障害研究，**20**，72-78.

三原博光　(2000).　障害者ときょうだい—日本・ドイツの比較調査を通して—　改新社

三原博光　(2003).　障害者のきょうだいの生活状況—非障害者家族のきょうだいに対する調査結果との比較を通して—　山口県立大学社会福祉学部紀要，**9**，1-7.

三原博光・松本耕二・豊山大和　(2005).　障害児の両親の育児意識に関する研究—障害児ときょうだいに対する比較調査を通して—　山口県立大学大学院論集，**6**，81-87.

中西由里　(1993).　きょうだい　児童心理学の進歩，**32**，219-241.

西村辨作・原　幸一　(1996a).　障害児のきょうだい達(1)　発達障害研究，**18**，56-67.

西村辨作・原　幸一　(1996b).　障害児のきょうだい達(2)　発達障害研究，**18**，150-157.

西村辨作　(2004).　発達障害児・者のきょうだいの心理社会的な問題　児童青年精神医学とその近接領域，**45**，344-359.

橘　英彌・島田有規　(1998).　障害児のきょうだいに関する一考察—障害をもったきょうだいの存在を中心に—　和歌山大学教育学部紀要，**48**，15-30.

吉川かおり　(1993).　発達障害者のきょうだいの意識—親亡き後の発達障害者の生活と，きょうだいの抱える問題について—　発達障害研究，**14**，253-263.